目　次

はじめに　吉岡 英幸　i

第 1 部　日本語教材の歴史　1

第 1 章　日本語教材の歴史的変遷
吉岡 英幸　2

第 2 章　韓国の日本語教科書における記述内容の変遷
金 義泳　26

第 2 部　日本語教材の分析　47

第 3 章　日本語教材研究の視座
──日本語教材研究フレームワーク作成への試案
河住 有希子　48

第 4 章　第二言語習得研究からみた教材
義永 美央子　65

第 5 章　コーパスから見る日本語教科書
中俣 尚己　92

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第3部　日本語教材の使用 115

第6章　教員と教材の関係
——医療福祉日本語の教材分析と評価を通じて
荒川 洋平・木村 亮子 116

第7章　教材を使う授業の意義
李 暁燕 144

第8章　日本語教師を取り巻くテクノロジーの変遷
山田 智久 174

第9章　「教科書で教える」とはどういうことか
——これからの日本語教材研究
本田 弘之 195

解説　日本語教材目録データベース　田中 祐輔　225

おわりに　本田 弘之　227

索引　229

執筆者一覧　232

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第１章

日本語教材の歴史的変遷

吉岡 英幸

Keywords

日本語教材　総合教科書　文型　変遷　継続

1.　はじめに

「現在日本語教材がどのくらいあるか」と問われて、自信を持って答えられる人はほとんどいないだろう。なぜなら、教師がそれぞれ自作の教材や実物などを教室で使用していることも多く、日本語教材と呼べるものすべてが書店の店頭に並んでいるわけではではない。また、海外で出版されている日本語教材も多く、それらが国内の書店ですべて販売されているわけではないからである。これまで歴史の中で消えていった教材も多いと思われ、国内・海外で作成された日本語教材がどのくらいあるか、正確に把握することは困難である。しかし、近年こうした各地域各時代の日本語教材を調査し保管しようという動きもあり、少しずつ情報も集められるようになった。日本語教材の歴史的変遷について研究しようと考えた場合、まず、いつどこでどのような日本語教材が作られたかという情報を広く集め、それらの教材を調査することから始めなければならない。そして、その調査をもとに各教材がどのような編纂者によって、どのような目的で、どのような学習者を想定し、どのような内容・構成をもった教材か、表記・発音・文法・語彙などの学習項目や想定されている教授法、教材が生み出されるに至った社会背景などを分析することが、教材史研究の基本となる。

多用な日本語教材がまとまって刊行されるようになったのは、日清戦争

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第2章

韓国の日本語教科書における記述内容の変遷

金 義泳

Keywords

教育課程期　高等学校の日本語教科書　否定的記述
侵略　後れた文化

1. はじめに

韓国における日本語教育の歴史は、①朝鮮時代（14 世紀末～19 世紀末）、②開化期（1876～1910 年）、③植民地期（1910～1945 年）、④教育課程期（1945 年以降現在まで）のように大きく四期に分けられる。韓国の日本語教育は、反日感情のある中で行われてきているが、各時代において最も重要な外国語として最も多くの学習者が学習してきた言語でもあった。1945 年の植民地解放後、1961 年、大学で日本語科が新設されるまでの約 15 年間、韓国では公的な教育機関においての日本語教育は行われていなかった。

そして、韓国の高等学校で日本語教育が再開されるのは、1973 年の第 2 次教育課程[注1] からである。それ以降、日本語教育は継続的に行われ、現

注1　日本の「学習指導要領」にあたるもの。韓国の「教育課程」は第 1 次から第 7 次を経て、その後は「2007 改定教育課程」「2009 改定教育課程」が告示され、2015 年 9 月 23 日には「2015 改定教育課程」が告示された。日本語科目は「2009 改定教育課程」による日本語教科書が 2014 年に出版され現在まで使われている。「2015 改定教育課程」による日本語教育は 2019 年に教科書の出版とともに実施される予定である。各教育課程の告示年度は次のようである。

・第 1 次教育課程期：1954～1963 年
・第 2 次教育課程期：1963～1974 年

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第3章

日本語教材研究の視座

―日本語教材研究フレームワーク作成への試案

河住 有希子

Keywords

日本語教材　教材研究　視点　方法　対象

1.　はじめに

日本語教育の歴史は長く、これまで数多くの日本語教材が作成されてきた。吉岡（2012）の「1946年～2010年の日本語教材目録」を見ると、分野別に1398の教材が掲載されている。また「1946年～2011年の日本語教材関連論文目録」には、783の教材教具研究に関わる論文が掲載されている。このことは、多くの研究者が教育と学習に関わる研究と実践を積み重ね、その研究成果に基づく教材作成および教育改善を繰り返してきたことを示している。ところが、教材研究の方法論については、これまでほとんど議論されてこなかった。

川瀬（2007）は教材開発に関する基本的課題として(1)教材開発・教科書作成の方法論に関する調査研究、(2)教材開発の歴史的変遷に関する調査研究の二つを挙げ、研究方法として、教材についての網羅的調査研究と具体的事例研究が必要となると指摘している。また、斎藤（1986）は、日本語教科書の研究方法について考えるにあたり、教科書論は言語学の項目ではなく教育学の項目であると考えること、教科書論は作成と使用の両面から論じなければならないことを指摘し、外国語教科書を評価するにあたって考慮すべき点を、Rivers（1968）が示す25項目に沿って、日本語教育の視点から示している。これらは教材研究の研究領域を示し、研究の視点と方法を方向付けるための示唆に富むものである。しかしながら、こ

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第4章

第二言語習得研究からみた教材

義永 美央子

Keywords

第二言語習得研究　初級日本語教科書　受身
言語行動・課題遂行を通じた学習　教材分析

1. はじめに

本章では、第二言語習得研究（second language acquisition research：以下、SLA 研究）の知見に基づいて日本語教育の教材、特に初級教科書について検討する。SLA 研究が何を意味するのかは人によって異なるが、ここでは人が母語ではない言語（外国語や、第三言語・第四言語も含む）を意識的に学習したり無意識的に習得したりする過程、その結果としての言語産出、学習・習得に影響を与える個人内要因および外的・社会的要因などの研究と大まかに定義しておこう。従来は学習の認知的側面に焦点を当てることが多かった SLA 研究であるが、近年、言語使用の状況性、社会性をより重視し、コミュニティにおける実践（相互行為）への参加を習得の母胎と捉える社会的視点からの研究も増えつつある（義永 2009）。

このように広範な SLA の研究分野やその成果をここですべて紹介することはできないが[注1]、本章の前半では、主に認知的アプローチに基づく SLA 研究の知見と教材開発の関連性をみることを目的に、日本語の受身の習得研究を例として、研究の知見が初級日本語教科書における受身の扱

注1　近年、日本語でも多くの SLA 研究の入門書が出版されているので、関心のある方は迫田（2002）、小柳（2004）、白井（2008）、大関（2010）、白畑・若林・村野井（2010）、門田（2010）などを参照してほしい。

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第5章

コーパスから見る日本語教科書

中俣 尚己

Keywords
文法コロケーション　使用傾向　例文　会話コーパス

1. はじめに

コーパスとは「実際に使用された」「大規模な」言語データを「電子的に処理できる」ようにしたものである（石川 2012）。日本語教育におけるコーパスの利用は『KY コーパス』『上村コーパス』といった学習者の発話を文字化した学習者コーパスがまずは多く使われたが、2011 年に国立国語研究所が母語話者の大規模コーパス『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（BCCWJ）を完成させると、これを使った研究も多く見られるようになってきた。

コーパスを使った研究の特徴を一つ挙げるなら、それは現実の使用における傾向を洗い出すことを目的とすることである。その点で例外のない規則の発見を目的とする従来の言語学研究とは大きく異なる。しかし、現実の使用における「傾向」や「偏り」は言語学習においては非常に有益な情報である。たとえば森（2012）は使役マーカーの「せる・させる」は実際に大部分は「怒りを爆発させる」のような、対応する他動詞を持たない自動詞を、他動詞として使うために付与されているにすぎず、「先生が学生に本を読ませる」のような典型的な使役構文の割合は高くないことを指摘している。これは初級クラスにおける使役の扱い方を再考させるに十分な情報である。頻度はそれ自体が文法の一部である（Bybee 2010）ということばもあり、それは絶対のルールではないが、確かに言語の一側面で

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第6章

教員と教材の関係

―医療福祉日本語の教材分析と評価を通じて

荒川 洋平・木村 亮子

Keywords

LSP−JSP−JHP　役割　プレサービス　教材評価　基準

1.　はじめに

Today the variety of LSP textbooks is broader than in the past.

（Lavorda 2011）

（今日、特化目的の言語を学ぶ教科書の種類は、昔よりも多くなっている。

―筆者ら訳、以下同様）

このシンプルな言明が示すように、LSP（Language for Specific Purposes: 特化目的の言語[注1]）教育の教材は、多様化の一途をたどっている。市販教材と教室状況とのギャップを埋めるために自作するプリント類も考慮に入れると、授業を担当する教員が以前より多くの教材を用いるようになったことは、経験的にも首肯できる。

この背景にあるものは、母語・レベル・ニーズなどの変数で示される学習者の多様化と、教育機関や各国の教育政策など教育を決定づける状況の多様化である。言い換えれば、外国語教育に影響をもたらすミクロ要因とマクロ要因（McGrath 1998）の双方に生じた、大きな変化の帰結である。

日本語教育もまた、例外ではない。凡人社が毎年発行する『日本語教材

注1　LSPとは、特定の限られた型のコミュニケーションのために使用される第二言語あるいは外国語を指し、通常の言語とは異なった語彙的、文法的あるいは他の言語的特徴を有する（ジョンソン・ジョンソン 1999）。

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第7章

教材を使う授業の意義

李 暁燕

Keywords

講義型　活動型　ステレオタイプ　学習材料
自律学習　ASCI モデル

1. はじめに

筆者はこれまで中国と日本の日本語教育現場に身を置きながら教育研究活動を行ってきた。二つの教育現場はさまざまな点で異なるが、ことばを教える立場に立つ教師の目には、共通する点も多々ある。その一つは、教材の使い方である。筆者の勤務した中日両大学の日本語クラスにおいては、学期の始まる前に教材に沿って教育目標とシラバスを作成し、同種同レベルの科目に複数のクラスがある場合は、学期を通じて担当教員らがペースを合わせながらシラバス通りに教育を進めていた。特に筆者の勤めていた中国の某外国語大学では、日本語学科の定員は1学年600人であり、日本語学習者が100万人[注1]を超える中国の中でも規模の大きい日本語教育機関である。日本語学科の学生が卒業するまでに、日本語能力試験と中国国内で行われる専門日本語四級・八級試験[注2]を受けることになっ

注1　国際交流基金「中国（2014年度）：日本語教育国・地域別情報」による。<http://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/area/country/2014/china.html>（2015年9月11日）

注2　専門日本語四級試験と八級試験は、2002年6月から実施されたものである。中国では英語、フランス語、日本語などの外国語検定試験として、中級レベルの四級試験と上級レベルの八級試験が定められている。

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第8章

日本語教師を取り巻くテクノロジーの変遷

山田 智久

Keywords

ICT　反転授業　SDC モデル　TPACK フレームワーク
デジタル・ディバイド

1.　はじめに

今日の日本語教師にとってパーソナルコンピューター（以下パソコン）は、なくてはならないものとなっている。教材を作成する際には、Word や PowerPoint などのオフィスソフトが用いられる。授業で絵カードの提示に PowerPoint を用いる教師も徐々に増えつつある。もちろん、情報の検索にインターネットは不可欠なものとなっているし、同僚の教師、学習者とのやりとりには、電子メールが用いられるのが一般的である。さらに近年では、反転授業[注1]なども授業に導入されるようになり、日本語教師を取り巻く ICT[注2] 環境は刻々と変化している。したがって教材研究を射程とする本書においても、ICT が日本語の教育現場でどのように用いられ、授業をどのように変えていく可能性があるかについて概観することは、これからの日本語教育を考える上で避けては通れないものである。

上述したように、日本語教育界において ICT は単なる教材作成の道具としてだけでなく、今までの教師の仕事の仕方や授業そのものを根底から変えるほどの影響力を持つようになってきている。その一方で、ICT の

注1　詳細は、本章第 2 節を参照のこと。

注2　Information and Communication Technology の略語。本章では、デジタル機器やデジタル教材、e-learning、MOOC などを含む広義として用いることとする。

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

第9章

「教科書で教える」とはどういうことか

―これからの日本語教材研究

本田 弘之

Keywords

日本語教育産業　教科書　日本語教師　インテンシブコース

1. はじめに

本章では、日本語教育が行われている現場において、教科書がどのような役割をもっているかを再考し、さらに、教師と教科書がどのような関係にあるかを明らかにする。

これまで日本語教育学において「教材研究」が占める割合は大きいとはいえなかった。そして、その決して多くない研究の多くが、教材と学習者の関係、あるいは、教材と現実の日本語使用の相違を論じるものであった。すなわち教材に記述されていることが研究のテーマとなっていたのである。

一方、現在、日本国内で行われている「産業としての日本語教育」の構造を考えると、教科書は、日本語教育プログラム（シラバス）における「マニュアル」としての機能を果たしていることがわかる。現在の日本語教育の現場では、この「マニュアル」としての教科書の存在が不可欠であり、教師が教科書通りに授業を進行することを前提としてプログラムが設計されているのである。本章2節では、現在、日本国内で一般的に行われている「産業としての日本語教育」が要求する教科書の「マニュアル」化について考察する。

このような状況のもとで授業を担当する教師には、「教科書の決められた部分『を』教える」ことが要求される。しかし、経験の長い日本語教師

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

解　説

日本語教材目録データベース

田中 祐輔

1.　はじめに

「日本語教材目録データベース」は、『日本語教材目録及び日本語教材関連論文目録』文部科学省科学研究費補助金基盤研究 C 研究成果報告書（代表者：吉岡英幸）に掲載された教材目録の加筆・修正の任を受け、作成したデータソースをくろしお出版の Web サイト上に設けたものである。本データベースは、日本語教材計 2,259 点（2016 年 2 月 20 日時点）に関する情報が記されたものとなっている。

① No.
② 西暦
③ 教材（和名）（英語名・中国名・ローマ字など）
④ 著者
⑤ 出版社
⑥ レベル
⑦ 対象
⑧ 分野
⑨ 媒体
⑩ 指（教師用指導書の有無）

① NO	② 西暦	③ 教　材（和名）	教　材（英語名・中国名・ローマ字など）	④ 著者	⑤ 出版社	⑥ レベル	⑦ 対象	⑧ 分野	⑨ 媒体	⑩ 指
1	50		「Basic Japanese Course,Practice book 1-2」	長沼直兄	長風社	初		文法		
2	50-51	「改訂 標準日本語読本 1-5」		長沼直兄	長風社	初級-上級		総合		
3	51-66	「漢字帳」	「Kanji book : accompanying Revised Naganuma tokuhon bk.1-3」	長沼直兄(Naoe Naganuma), 高塚竹堂	長風社,日本出版貿易(発売)			文字/補助		
4	53		「Japanese in thirty hours : first course in Japanese language for either class room use or for self study : systematized direct method」Re-rev. ed	清岡暎一(Eiichi Kiyooka)	Hokuseido Press	初級		総合		
5	53		「Ucebnice hovoroveho jazyka japonskeho」	sestavila a napsala Vlasta Hilska, prohledl a doplnil Jaroslav Prusek	Nakl. Ceskoslovenske akademie ved			文法		

図 1　本データベースの見出しと一覧（抜粋）

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers